平成３０年度　地域でつながる家庭教育応援事業

地域家庭教育推進県北ブロック会議（第１回）

日　　時：平成３０年6月１１日（月）９：４５～１１：４５
場　　所：杉妻会館会議室「百合」

「自己肯定感の形成について」

座　　長　　福島大学人間発達文化学類教授　　原野　明子　氏
情報提供　　福島県中央児童相談所専門保育技師　荒井喜佐子　氏

本県の家庭教育推進上の大きな課題である「親の学び」を支援するために、各郡・市(町村)ＰＴＡ連合会・地域代表・企業代表による県北地区ブロック会議を実施した。今年度は、「自己肯定感の形成」を主なテーマに据え、協議を行っていくようになる。
第１回目の今回は、福島県中央児童相談所から、実例を交えた情報提供をいただいた。自己肯定感をもたせるために何が必要になるのかを、構成員がそれぞれの立場から考えるとともに、家庭への支援をどのように進めていけばよいのかについて活発な意見交換がなされた。

１　情報提供
福島県中央児童相談所　専門保育技師　　荒井　喜佐子　氏

「自己肯定感の形成」に必要不可欠なものとは？

（１）一時保護所
- 一時保護所は、様々な理由により、大人の支援を受けられない２歳～１７歳までの子どもが一時的に入所してくるところである。
- 保護されてくる子どもたちは、「必要な衣食住が保障されていない」「危険にさらされてきた」「保護者から必要な関わりを受けてこなかった」「学校でのいじめを受けたと感じている」などの特徴が見られる
- 一時保護所では、衣食住の確保等安全・安心な生活を保障すること、個に応じた必要な関わりをすること、心の傷を受けないように配慮することなどに留意している。

（２）３件の事例

事例１：不登校　ネグレクト

事例２：虞犯（ぐはん）

事例３：虞犯（ぐはん）

３つの事例それぞれについて、保護されるようになった背景や一時保護所で行った対応、その後の変容等について、具体的で詳細な報告がなされた。現場の生の声に参加者は真剣に聞き入っていた。

（３）まとめ

- 一時保護されてくる親子の行き違いは、親の人格や愛情の問題があるから生じているのではない。親が子育てをするための経済的、時間的、心理的な余裕がもてない状況に陥っているから、親子にとって好ましくない関係が生じてしまっている。どんな親でも自分の子どもはかわいいと感じている。決して愛情がないということでない。ただ、様々な理由により子育てに余裕をもてないということである。
- 学校でも家庭でも、子どもたちをほめることは大切なことである。一時保護所では、ほめるポイントが少しでもあればそれを見つけて、意識的にほめるような仕掛けをしている。子どもたちは、大人のことをよく見ている。「ほめられる」「信じてもらえる」「理解してもらえる」という経験を繰り返していくことが、子どもたちの自信回復と自己肯定感の形成に結びついていく。
- 入所してくる子どもは、自分の気持ちを分かってもらう、受け止めてもらうという体験が非常に乏しい。だから、自分の話をじっくり聞いてもらえる、理解してもらえると実感できるような関わりが大事になる。

２　全体協議

協議の視点「自己肯定感の形成のために何が求められるか」

【協議の中で出された意見（抜粋）】

○　児童相談所に、生徒の事例を相談をしたときに、丁寧に対応していただき、大変助かった。問題行動には様々な事例があるので、警察やスクールソーシャルワーカー、民生委員など、状況に応じて相談できるところが多い方が良いと感じている。

○　子どもの支援が必要な場合、対象児童だけでなくその保護者にも課題がある場合がある。個々の状況に応じて、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーを活用している。

○　子どもが問題行動を起こす場合、その保護者が何らかの課題を抱えていることが多い。そのような場合は、学校だけでは対応が難しいので、週３回勤務しているスクールソーシャルワーカーや教育委員会の子育て支援課等とチームを組んで対応するようにしている。

○　不登校傾向の生徒の家庭は、子育てをする余裕がないと思われる場合が多い。生徒にとって、話を聞いてもらえたり、ほめてもらえたりする環境が大切だと感じる。様々な機会を捉えて、生徒の話を聞く姿勢を保護者にも伝えていきたい。

○　子どものSOSを一番近くで感じ取れるのは、やはり保護者である。家庭でのコミュニケーションの必要性を再認識した。知り合いで、引きこもりになってしまった子どもを回復させるための手段として、ポケモンGOを活用したと聞いたことがある。メディアも使い方によってはプラスに作用する場合もあると思う。

○　父と子の一人親家庭では子どもと会話ができる女性のの存在が大きい。スクールカウンセラーが女性の場合は、母親を感じさせる効果も期待できる。地域の方々や学校の先生など、みんなで子どもに関わることの大切さを実感している。

○　ほめることが大切なことは理解しているが、家庭ではそれだけではしつけができない。上手な叱り方も必要になる。また、子どもたちは、家庭では見せない一面を学校で表すこともあるので、家庭と学校との日頃からのコミュニケーション作りが求められる。

○　自分が関わった子どもの円形脱毛症が家庭環境に起因していたという事例があった。学校や家庭だけでなく、放課後の活動場所など地域全体での見守りがより一層必要になると感じる。
○　就学時健診に関わっているが、自分の子どもの良いところを探すプログラムがある。また、親の悩みを共有するプログラムも組み込んでいる。親同士が相互に学び合いを行えるような場面を意図的に設定している。
○　学校と地域の連携を図るために、積極的に民生委員などの地域人材を活用してほしい。

○　子育ては、やり直しがきかないときもある。親がなかなか関わることができない時は、周りの大人や地域の方々の存在がとても助かる。また、親と子どもが一緒に関わることができる場所づくりも大切になる。企業としても、年休を取りやすくしたり、食育を考えて社員食堂を充実させたりするなど、様々な取組を行っている。
○　子どもと関わることの大切さなど、様々な親の学びができる研修を実施していければよいと感じる。
○　普段はなかなか聞くことができない児童相談所の事例を発表していただいて、よい研修になった。事例にあったような問題行動を起こしてしまうと、我々の立場では支援できない状況になってしまう。大切なことは、そうなる前の予防的な対応をどれだけできるかである。そのために地域全体でアンテナを高くして、子どもたちを見守っていくようにしたい。

３　成果と課題

＜成果＞

○　県中央児童相談所の方から、普段はなかなか表に出てこない生々しい現場の事例を話していただいた。理念や理想ではなく、実際に起きている現実に目を向けることができた。それにより、社会全体で子どもたちやその家庭を支援することの重要性を構成員全員で再認識できた。
○　構成員それぞれの立場で、自己肯定感の形成に向けて何が求められるかという視点で全体協議を行った。構成員一人一人の考えや意見を全体で共有するとともに、気を引き締めて子どもたちの健全な成長を支えていくという意識を高めることができた。
○　協議の中では、事例発表をもとに、学校、ＰＴＡ、行政、企業、地域などそれぞれの立場から、活発な意見交換がなされた。事例発表や協議を通して、構成員一人一人が、学校や地域が家庭教育を支えるための手立てを、より踏み込んで考えるきっかけになった。

＜課題＞

○　児童相談所の事例には至らないまでも、どの家庭でも親自身が子育てに余裕がもてない現状がある。（経済的に余裕がない、共働きで時間に余裕がない、様々なストレスで精神的に余裕がない等）親の余裕のなさが子どもたちに何らかの影響を与えていくので、親が少しでも余裕をもって子どもに向き合えるよう、社会全体で家庭教育を支えていくことがより一層求められる。
○　人間関係の希薄化、自尊感情の欠如、豊かな体験の不足、ネット依存など自己肯定感をもてない背景は様々だが、子どもや親が少しでも自己肯定感をもてるような手立てを地域全体で考えていく必要がある。今回のブロック会議の話し合いを、親子の学び応援講座やフォローアップ研修につなぎ、より多くの人たちに広げていきたい。